３．文化人類学的に貧困、不平等を考察する

（文化人類学的な貧困不平等へのアプローチを試みる）

（１）生存条件の枯渇

文化人類学的な表現においては、人類にとっての「生存条件の枯渇」が、貧困の状態と言えるであろう。人間存在は自然生物的であって社会文化的な社会集団の生活へと移行しつつ、その生活の中に生じる貧困不平等問題であり、ここに向き合う人間達の対応は、社会文化的な側面の全体をもっての対応としてありながら、同時に生物的生命現象の維持、いのちの継承を求める、自然生物的な営みと重なっている。こうした人間存在、その生命活動としての生活の把握において、厚生経済学的な視点からの貧困不平等へのアプローチは、「厚生」という人間の心理的満足感を軸にしての「組みたて」から進められている。

これに対して、人間の存在様式を、自然生物的であって社会文化的な社会集団の生活へと移行しつつあり、その自然と文化の双方を捉えつつのアプローチ、文化人類学的なアプローチは、生活財の配分問題をこの文脈において検討し、同時に社会制度を抱えつつ生命活動を営むところの、人間の社会集団的な生物生命活動としての人間生活、社会活動の全体性、相互関連性を持って動く、貧困不平等問題を捉える視点を抱えていると思われた。

そこで文化人類学的な貧困・不平等へのアプローチは、人間の自然と文化の重なりと言った生活諸分野の複層性、重合性を前提にして捉える視点として、「厚生」や「満足感」の背景たる生活文化的な要求の充足と生物的生命現象の安定という双方が問題として浮かび上がるアプローチへと向かいうると言えよう。貧困不平等の構造は、人間が自然生物性から社会文化性へと今なお移行しつつある歴史性、時間性を背負い、今や社会の中を生きる人間の生活の諸条件において、人類の生活の全分野を覆いつくしている、社会文化性とされる内容の広大無辺なさまを視野に入れざるを得ない。そして生物的生命の維持のための諸条件の枯渇という場面においての、生命危機に至る経過を視野に入れつつのアプローチを「消える事ない響きとしての自然生物性」をベースに置かざるを得ない。

文化人類学的視点は、人間の生存条件の枯渇を、貧困状態として、その進行の経過を生活諸条件の複合性、重合性を通して、構造的把握を可能にするであろうと思われる。そしてこのアプローチは、21 世紀の今日の「新しい貧困」とされる「社会的排除概念」の概念の有り様とは、大きな共通性の中にあると言えよう。貧困不平等は社会に於いて、個人において、時間性をもって構築される事象として、その意味では全ての人々にとって、当事者足り得る社会問題と言える 21 世紀なのかもしれない。

（2）貧困・不平等問題の範囲

相対的貧困と言われる豊かな時代の新しい貧困は、生物的生存は果たせていても、その人々の社会生活、それを支える社会関係の質、社会の標準的な水準を維持できない程の低所得状態であり、対峙する人間には心理的衰弱を引き起こす事が指摘されている。この相対的貧困概念の提唱者タウンゼントは「貧困な人々の生活資源は、平均的な個人や家族が自由にできる生活資源に比べて極めて劣っているために、通常社会で当然とみなされている生活様式、習慣、社会的諸活動から事実上締め出されて（deprived）いる[1]」として「剥奪(deprivation)」という心理学的概念によってその貧困の輪郭を顕かにしようとする。

その社会で当然とみなされている生活様式を送る人々との比較において、その生活の劣勢状態を、いわば負の逸脱状態を切り取っている貧困概念であるところから、相対的貧困と**「不平等問題」とは同値**と言わざるを得ず、それらは人間の社会文化性に覆われた生活の全体、総体と重なり合いうるところの、心理社会的な劣勢状態として理解される。

自然生物的存在から社会文化的存在へと移行するホモ・サピエンスの移行過程に、貧困・不平等問題の発生を重ね合わせながら、社会文化的な存在へと移行しつつ生活を営み、戻る事の出来ないという、その移行過程を続けている人類集団、そのなかに生じた不平等、あるいは互酬性の齟齬、生活困窮や絶対的貧困状態も含めた、新しい貧困（相対的貧困・社会的排除）が概念づけられている。

自然生物学的で社会文化的な人間存在における生存条件の現れ方、社会生活上の齟齬、劣勢についての考察の中に、生活の多面性、生存条件の相互関連性、生活文化的な各側面の相互性を前提にする生活困難の様態、その検討すべき範囲について、平等問題としての各事象の重なり合い、相互関連性をもって動く様態、その把握という視点が生じ得るであろう。

レヴィ=ストロースが「それ故に生物学、人口統計学、経済学、社会学、心理学、哲学――との関係をめぐる一連の問題に触れる、『隙間を突く』科学である」とする文化人類学であり、一方の社会学、厚生経済学的な貧困研究においても、その学問領域の双方をカバーするところの、互いに隣接領域については共通的と思われ、人間が自然生物的存在でありつつ社会文化的な状態に移行しつつある、その存在様式に目を向けるならば、双方において問題となり、問われねばならない諸領域、それら境界領域について、貧困研究と文化人類学の重なり合いの様相の中に新たな気付き、展開が見えるのではないだろうか。

文化人類学的な、あるいはレヴィ＝ストロースの言う、人間は自然生物学状態から社会文化の状態へと移行したとする人間の存在様式を受け入れるならば、不平等問題とは、社会文化の状態に移行した人間存在に特有な、社会関係上での、差異を識別する人間ならではの、

1　杉村宏　『貧困・不平等と社会福祉』　有斐閣　1997　年　4　月　P72

社会文化的な生存条件の枯渇、喪失課程であり、その範囲は社会生活の多面性、相互関連性の中の、生活財の所有、家族集団関係、社会集団への参加や拘束の様態として、それら相互関係性、時間的な経緯、歴史性を含めて、人間の生存条件とその在りようとして浮かび上がるのではないだろうか。

４．文化人類学的なアプローチ

（１）原初の集団規制（ルール）

人間は自然的な生物、哺乳類サル目ヒト科ヒト属、ヒト属で現存する唯一の種ホモサピエンスでありつつ、その生命現象は生活と呼ばれる状態として、社会集団内にあって、種々の社会関係の網の目の中で展開しつつあるといえよう。自然的生物的な生存条件、食料の確保、風雨を凌ぐ洞穴、住居、衣服を調達に努め、親族集団、社会集団の規律、規制の中で動く社会集団内的存在して生を営んでいる。

人間は社会集団の生成と発展とともに、自然生物的な生命活動を、社会集団内での規制を受け入れつつ、互いの生存と種の継承を、社会集団の継承に重ね合わせ、集団に自らの運命を託しつつ、社会へ、文化状態へと移行したのであろう。この経過の始まり、重要な環としてのインセストのタブー、近親相姦の意味合いについて、レヴィ＝ストロースは親族の基本構造こそが、人間存在の自然から文化への移行を捉えて、このエピソードを、自然と文化を繋ぐ「蝶番」としている。

食料やその他の生活財の調達、自然生物的な人間の生存条件の確保は、自然との対峙関係において営まれている場面で、自然的生物の営みとして、天災地変、天候の変化、様々な偶然の積み重ねの中で、調達不足は生起し、自然淘汰が引き起こされ偶発事象の連続、その結果ともいえよう。しかし人間が集団を形成し所属する集団内、あるいは集団間の関係、交流交換の中での食料や生活財の調達、その不足は、集団内、集団間の交流関係、社会関係の中の偏り、互酬性の棄損、不平等、その帰結、偏りの結果として表れる出でて、社会的に構築され固定されうる、生活財調達のための社会関係、財獲得のための権能の偏りとして、増幅し、あるいは減退するところの、生活財の枯渇として捉える事ができよう。

互いの生活の維持継承を求め合う交流関係こそが社会集団形成の動機であり、各社会集団内、集団間の交流関係においては、互いの生存条件の交換、互酬的な交換関係性が求められた。その互酬性の願いは、互いの生命活動、生存条件の確保において、その遂行、そして継続関係を可能ならしめつつ、地質学的な時を経過したものと思われる。互酬的な交流関係こそが集団規律のベースに置かれ、このルールこそが集団の生成の動因であり、生物学的人間の生命活動である生活は、集団を形成し、その内部で、自らと次世代の生命の継続を求めつつ、互酬的関係を求めざるを得ず、そうしてその集団規律をうけいれつつ、集団内で生きる存在へと移行したと思われる。

例えば、婚姻規則（インセスト・タブーの人類的な意味）について、文化人類学では、婚姻規則の調査、婚姻関係の結果である次世代、次々世代に渡る親族集団形成とその交流関係の輪について、人間が集団を形成し、集団内、集団同士の交流の形成過程に婚姻の相手である女性の交換を、集団間（二集団活計）の互酬的な交換の形式としている。このような互酬的な関係を求め合い、そのルールにおいて集団は生物学的な生命を、次世代を、種族を社会集団の形成、文化の状態へと移行することを通して、守り合う事ができたとされる。

（２） 互酬的な関係のずれ込み

しかしながらやがて人間の歴史は、各血縁的集団の交流関係、集団同士において、互酬性のずれ込み、齟齬、劣勢となる人々の存在を引き起こし、かつての互酬的、対等性から、さまざまな劣勢や集団内関係の齟齬、不平等の状態を引き起こしつつ集団の歴史は営まれたと思われる。

原初の集団規律にさまざまなずれ込み、齟齬を生じせしめ、それを拡大させる事が可能となるほどの剰余生産物、その交換関係に係る社会的権能、社会的立場における互酬性のずれ込み、差異が現れて、不平等を抱える社会へと移行が進行すると思われる。

そして人為的な自然、農耕文化を産み出し、その社会においては、人びとは次第に非互酬的な関係の中において、生物的生命維持が可能な人々が生じ、その中で非互酬性が進行、浸透しつつ、集団の時が流れたと思われる。その時人々は、集団内関係の劣勢について、**差異を識別する人間なればこそ**、その社会の代表的、標準的な人々との比較、対峙関係において、自らの困窮、自然生物的であって、社会文化的な「生存条件の枯渇」を感じるのであろう。人間が社会へ文化へと歩み出すにあたっての、差異を識別し、その差異を生きる場面での、人間の観念、その意識の動きは、さまざまな集団内の社会関係内での己の劣勢、差異を認める場合に、その社会心理的な劣勢状態を含めて、生活財調達上の劣勢を含めて、不平等問題として、社会的に構築されたと言うべきであろう。社会的な権能の差異を組み込んだ、習慣習俗法制度が敷かれていった。

人間の差異を識別する力、それは自然の中にあって、その胸、あるいは心、あるいは意識に立ち昇るところの、人間の気付き、やがては思い、想念の展開として、伝えあう言語を発して繋がる観念の世界を導いたのでもあろうし、その広がりのままに差異は識別され、社会の不平等の始まるのであろう。

人間の類推作用、暗喩、転論、反転などと展開するアナロジーの網の中で、あるいは観念の世界、あるいは象徴機能が届き、想念の展開し得るところのすべて、そのさまざまな文化事象において、その広がりの及ぶところにおいて、社会的、集合的な想念、人間の差異を識

別する力は、人間の物的生活、そして精神生活、それらすべての生活領域に渡って、不平等は捉えられ、感じられつつ、人々の生活世界、社会集団、その規則の内側に広がり尽していったと考えられる。

（3）（不平等問題の発生）

人間生活を包み込み、人間が生きる上での箍（たが）であるところの社会において、社会内の人々の生活を規定する、その集団内の人々の交流する質との関係の中で、その社会における平均的、代表的、主流にある人々との比較対照、関係性において、差異を識別するが故に浮かび上がる、個々人の劣勢こそが不平等問題というべきであろう。これを容認、強制するところの社会制度、社会組織が構築される。

そこで自らの形成する社会関係には、平均的な人々との間に差異があり対等性が失われている事、その個別的な事実とその多様な事象集合たる現実課程というべきが、不平等問題であろう。厚生経済学的には、己の状況は誰との比較において差異があり、それは劣勢であると言う関係こそがこの概念を枠づけ、ここでジニ係数には「均等分割線」をもってその関係を把握している。（厚生経済学的な不平等比較は所得においてなされる。）

どんな生活領域、生存条件において、誰との比較において、どれだけのマイナスの逸脱なのか、さらにはその集団の人口構成、所得のバラツキ度が不平等の構造を規定する。ここに不平等には多様な捉え方、評価、見解があり不平等問題の相対的とも言われる構造が存在している。

不平等は、ついには生活財、食料の配分上の偏りとして表れるのであろうが、その背景であり、原因であり結果でもあるところの、個人における社会関係上の劣勢、「社会文化的な生存条件と自然生物的な生存条件」の重なりの中で、非対等的、非互酬性に対峙する人々の剥奪感、無力感などの、社会心理的問題を抱える人間社会の状態、その状態が不平等として概念化されていると考えられる。

（4） 人間の生存条件の枯渇の様態

人間は生物学的存在でありつつ、集団や社会の一員として生活を営む存在であり、社会と言う箍の中で生活を成り立たせている。社会という箍（たが）の外では生活は成り立たず、今や人間にとっての「野生状態」とは、「隔絶した人間が退行してそこの立ち戻りうるような、種族の自然的なふるまいというようなものは存在しない[2]」のであり、人間存在は自然生物的な生命活動を、社会集団の中で、社会関係を通して生活財（衣食住）を獲得するとい

---

[2] クロード・レヴィ＝ストロース 監訳馬淵東一・田島節夫『親族の基本構造（上）』P59　番町書房 昭和 62 年 3 月 20 日として、

う、社会を文化を伴いつつの生命活動、「生活」を営なむ存在となって歴史を重ねている。

① 人間生活遂行に係る諸条件（生存条件）

リンネが命名した、ホモ・サピエンスこと人類は、生物学的生命現象を、社会文化的な環境の中で維持する存在であり、生物的な生命活動でありながら、社会文化的な活動であるところの「人間生活」を生きるところに、人間と言う種に特殊的な構造が現れていると言うべきであろう。「人間生活」とは、いわば張り巡らされた種々の社会関係の網の中、あるいは社会という「箍」の中で、社会関係を介しての生命活動と言えよう。

そのために人間存在は、その生活の遂行に係って、社会関係上の齟齬、不都合、制約が生じて場合、その状況対面する人々において、生活財調達困難が生じる場面に対峙するならば、人間は自然生物的な食料の調達の困難、不足、渇き、そして凍えを来して自然生物的な生存を危うくするのであり、また社会文化的な生活のさまざまな局面で、さまざまな社会関係上の齟齬、不都合、制約、劣勢に対峙する場面、婚姻規則に始まる集団規制を抱えつつ、それぞれ心理的衰弱、無力感などを伴う社会文化的な「生存条件の制約、枯渇」に痛みつつ、世代を重ねていると言えよう。

人間は、その生命活動である「生活」の遂行に係って、**社会関係上の齟齬、不都合、劣勢に対峙する場面で、自然生物的、社会文化的なさまざまな「生活遂行上の困難」を呈し、その自然生物性と社会文化性の重なり合いとしての「生活遂行上の困難・枯渇」の中で、集団の中の地位を生きており、その状態を貧困として捉える事ができよう。**

② 社会文化的な生存条件の枯渇と人間の生物性

貧困とは、文化的状態に移行した人間における生活の困難として、自然的（生物的）でありながら、文化的社会的な生存条件の枯渇である。貧困は、その二つの次元（自然的生物学的生存条件と社会文化的生存条件)の重なり合い、自然生物的、社会集団的な双方の窮乏を抱え込んでいると思われる。 いわば人間の自然生物的な要求を、社会文化的な環境、社会関係によってその生物学的生存条件を満たしている言う人間の存在様式が、他の生物種とは異なる、人間にとっての生存条件を規定している。その事を社会学の側からは、新しい貧困」として、「生活財の不足」ばかりではなく、「社会的排除」とされる社会文化性、社会関係性を重ね合わせ、人間の社会心理的な「剥奪感情」等を含めての貧困研究へと向かっている。

しかし差異を識別し、言語と言う意味生成の音声言語の発達によるコミュニュケーション、互いの交流関係を軸にする社会の中で、人間は決して自然状態にもどる事はできない存在として、社会的個人を生き続けねばならない。この文化状態、社会集団を生きる生活であるが故の新たな要求が膨大な時を刻んで複雑化、拡大しつつあると思われる。

しかしその一方では、自然的生物学的な「死」をめぐって自然的（生物学的）要求は喪わ

れる事ができない。人間生活は、その社会と文化の二つの次元を抱えつつの生活総体であり、そしてこの自然と文化という二つの要求は、自然（生物的）要求を主として文化的要求を従と考える事も出来ようが、従の部分である筈の文化的要求は時代とともに複雑化し拡大し、人間生活の全分野を覆い尽くし、この人間生活における不平等問題は、人間の生活の全分野に及ばざるを得ない。

伝統的な「絶対的貧困」という概念は、生物学的生命の維持に係る生活財、主要には食料への要求をベースに置く「生活ニーズ」の窮乏状態、その極まった状態であり、自然的生物的生命の危機を齎す程の窮乏であり、それは社会文化的なルートによって補償される要求である。そして相対的貧困、社会的排除については、前者は社会と言う檻の中の、多重層的な社会関係の中で生じる齟齬、劣勢としての貧困であり、社会関係における互酬的関係、対等性のズレこみ、あるいは劣勢の固定に対峙する人間の心理過程を軸にして捉えようとしており、生活財の不充足状態、その結果としての人間の心理的衰弱を捉え、社会心理的な領域から明らかにされる、社会文化的な「生活ニーズ」の不充足状態として捉えようとしている。集団内の諸社会関係、その網の目が途切れ、次第に社会関係を失う経過を、生活財の不足、不充足と重ね合わせて、貧困として捉えている。

「社会的排除」の概念構成は文化人類学的な視点と重なる所の、不平等問題の広がりとその生活問題、生物的生命維持へ影響のありようについて、有効な視点を提供すると思われる。

③ 生存条件の枯渇とその重層性・社会生活の広がり

人間の生活は、その生きる社会内の交流―家族、親族との交流関係、労働市場への参画・労働、地域社会、財市場への係りなど、その取り結ぶ社会関係の総体として考える事ができるであろう。その中で生じる、社会的交流関係における対等性、互酬性を失う場合には、差異を区別する人間なればこその、心理的な衰弱、あるいは「剥奪感」を生じると思われる。また生活財(食料等)の調達困難に晒される場面ではその人々は剥奪感情、心理的衰弱（無力感）を伴いつつの生活を送り、生活の維持継続の困難を生じる場面の重なりの中で、無力感などの程の社会文化的な「生活ニーズの不充足」をきたすと考える事ができよう。

この社会文化的な生活要求の広がりとは、人間の観念が産み出した領域のすべて、それは社会関係が人間生活に及ぼす全範囲が関係すると言う、人間の存在様式に沿った考察が有効になるのであろう。

レヴィ＝ストロースは「親族関係の生成こそ人間の生成すなわち、人間の自然状態から文化の状態への移行を記しづけるもの[3]」として、親族関係の生成を人間の社会集団形成、文化状態への移行のベースに置いている。親族関係の生成こそが、人間の集団を生成し、やが

[3] 渡辺公三『闘うレヴィ＝ストロース』P125 平凡社新書 498　2009 年 11 月

て集団の規律の生成を促し、人間はその規律を受け入れつつ、社会の内側で生活する存在へと向かったという。

そこで人間集団における原初の規律生成、婚姻規則は、自らの命と家族、血縁集団、社会集団の継続を互いに託しあう規律として、人類は婚姻規則を受け入れ次世代の生成と育成をこの規則に託しつつ、生活財の取得に係わる権能の互酬的な分かち合いの中で、生活を営み、それは集団内に生起する諸事項の分かち合い、互酬的な諸権能の交換関係として生成されざるを得ない親族関係をもって、互いの生命の継承を託しあう集団へ、社会へと、文化の状態へと移行したと捉えられよう。

人間のさまざまな「生存条件」は、生物的生命維持に係わる生活財（食料等）の社会的に満たされるより他はなく、食料を始めとする生活物資、そして生活の継続を求める諸ニーズは、やがて人間のさまざまな無形の望み、眼前の事実、現前の「実体」をこえた、集団への帰属、参加、諸権原への互酬的な要求など、抽象概念をも含みつつ、人間が文化の状態へと向かう契機であり、結果でもあるところの、「社会文化的な生存条件」の生成へと向かったと思われる。

（５）生存条件と社会集団について

そこで人間の観念作用、シンボル化能力[4]、あるいは象徴機能[5]の生み出した総体、言語的に表現されたすべて、共同体への帰属、参加、交換権限、自由、人権等の社会的権能を含む、有形無形の社会文化的事象も含んでの分かち合い、生存条件の確保が求められ、それら互酬性ある交流関係が求められ、行われ続けたと思われる。その関係性は、婚姻規則（自己再生産）次世代育成の軸と、生活財調達（自己維持）生活財調達に係わる社会関係を軸にして構成され、そうして生存条件は叶えられ充足され得たのであろう。それらが充足される社会であればこそ、社会としての人間集団は継承され、社会へ、文化へと移行を進めたと思われる。

この関係の中に、さらに時を経過しつう、何だかの齟齬、不都合、ずれ込みを生じ、生存条件が円満に充足され難い状態が現れる場面、人工の自然としての農耕の出現によって、生活財の交換関係における互酬性の齟齬、対等性のずれ込みが入り込み、固定化しつつ、諸集団規制において、社会関係の劣勢、齟齬、結果としての生活財の不平等が表れ出づると言った事態が現出するものと思われる。社会関係的な齟齬、劣勢に対峙する人々において、飢えや飢餓を伴う貧困が、不平等関係として生じ、そこで心理的な葛藤が生じざるを得ず、人間は心理的に衰弱するのであろう。人間は物質的困窮自体、あるいはその原因となり、結果である所の諸社会関係における劣勢や、「社会文化的な生存条件」の枯渇、不足に対峙する、

---

[4] 丸山圭三郎『言葉と無意識』P75　講談社現代新書　0871　1987 年 10 月 20 日
[5] 小田亮『レヴィ=ストロース入門』PP233　ちくま新書　265　2012 年 9 月

社会の階層化の進展の中で、世代を重ねている。

不平等問題、この事態の巻き起こる範囲は、生活物資の調達に限らず、人間の観念作用、象徴機能の及ぶ全ての範囲、有形無形の社会文化事象の全てにおいて、差異を識別する人間ならではの、**社会と言う箍の中で生きる人間の生命活動である生活、その継続に係るすべて、自然生物的であって社会文化的なすべての領域に及ばざるを得ないと考えられる。**

（6）文化人類学的視点による考察

① モースの「全体的社会的事実」社会的事実 デュルケム タルド論争

レヴィ＝ストロースが、モースの贈与論の結論を引用して「適切にもモースが『全体的社会的事実』と呼ぶところのもの、つまり、同時に社会的にして宗教的、呪術的にして経済的、公理的にして情緒的、法的にして道徳的な意味を併せ持つ事実を我々の前に示すもの[6]」と述べるところの、未開社会において重要な位置を占める交換活動は、経済的目的で行われると言うよりは、互酬的な交流関係として理解され、経済的な意味での交換活動には該当しないとモースは指摘するようである。交換によって「誰も相手からいかなる真の物質的利益をも得ない」のであり、「その目的とするところは、何よりもまず精神的なものであり、交換の目的は、それにかかわる当事者間に親愛の情を産み出すことなのである・・・[7]」という。

このような互酬的な交換活動の誘引であり目的でもあるところの人間の精神活動の一切、それらを抱えて交換し交流しあうシステムとしての社会、その内側を生きる人間の生命活動、生活の在り様は、「全体的社会的事実」と表現された交換、交流関係が示す原初の人間の精神機能の展開課程を包含する、交流を求め確かめ合う関係、社会関係生成過程として、その目的であり、結果そのものでもあると言った、社会関係の生成であろう。

社会という箍（たが）の内側において生を営み、生活の全体、生活財の調達はもとより、生活文化の全て、社会心理的な問題、家族関係、親族関係を包み込んでいる「社会文化的事象」を生きる人間存在は、それ故に人間の観念作用の産み出した全て、社会関係、権能、人間の生とその生きるモチーフ、人間を捉えているすべて、それら「社会的全体的事実」をかかえて、社会生成の誘因であり結果であるところの「社会文化的な事象」を生成しつつ、世代を重ねたと思われ、かつそれは次世代育成（自己再生産・生殖願望）と重なり合っている。

人間を捉えている全て、それらは互酬的な交換関係性への要求において叶えられ、しかしながらここに何だかの齟齬が生じる場面において、人間はその齟齬ゆえに生命活動として

---

6 レヴィ＝ストロース　馬淵東一・田島節夫『親族の基本構造（上）』P132　番町書房　昭和 52 年 11 月 20 日

7 同上 P134

の生活課程において、心理的衰弱を呼び起こされ、その事態が立ち現れるところの全分野において、その社会関係性に制約、齟齬、困難立ちが表れる場面のすべてに渡り、いわば様々の非互酬性故の「生活ニーズの不充足」を、社会的な不平等を生じるのであろう。

その範囲は、人間の精神を捉えているすべて、全ての生活分野、全ての象徴機能、観念作用において呼び起こされる有形、無形の文化的事象を含んでおり、そのベースにある生物学存在としての人間の生活要求、物質的な生活財の調達関係をも含んで、生活の全分野を覆わざるを得ない。その社会の実態について、貧困・不平等問題の文化人類学的なアプローチは、社会文化事象からの人間の生命現象を支えると言った視点において、不平等の実態を捕捉しつつ、社会構造的な把握、不平等の社会的影響についてを指し示すものと思われる。

② 分析枠としての「ジェンダー概念」のユニヴァーサル性

ところで先天的・身体的・生物学的に個体が具有する男女の性別に対し、「社会的・文化的に形成された性別」をジェンダーという。

上野千鶴子は「経験的に知られるジェンダー現象とは、生物学的性差の諸次元を含む重層的 ・複合的な現象であるのに対して、カテゴリーとしてのジェンダーはそうではない。」として、「社会的文化的カテゴリーとしてのジェンダーは、知られている限り厳格な性別二元制のもとにあり、連続性や中間項を排除する性格」を有する事を指摘する。

「ジェンダー概念」は、人間の性差、性別現象と言った、「現前の事実」である生物的特性とは同一ではなく、それを越えて強調され、規範化される傾向を有しているという。ジェンダーを「肉体的な差異に意味を付与する知」とするジョーン・スコットによれば、男／女と言うジェンダー・カテゴリーは「抽象的に機能している」あるいは「男と女と言う記号は、実体とは異なるレベルで様々な局面において意味を発生させている[8]」との指摘である。

この「意味の発生」の仕方については、「二項対立的、且つ非対照的な性的差異としてカテゴリー化された時にジェンダーが構築される」というのだが、男／女の二項対立は、男性性を主として、女性性を従とする構造、もっと鮮明にいえばカテゴリーとして、「規範的な価値と結びついて、優劣や上下関係のような権力や資源の格差をもたらす。」と指摘されている。

また社会文化的カテゴリーであるジェンダーの議論の開始時点、1970 年代以降の展開としては「70 年代に女性学が成立したが、それが 80 年代にジェンダー研究へと転換するにあ

8 飯田祐子『構築主義とは何か』上野千鶴子編　P93　勁草書房　2006 年 1 月

たって研究領域は格段に拡大し、アプローチは女性という「項」から性別という「関係」へ、さらに女性領域というローカル（局地的）から学際横断的にあらゆる分野へジェンダーという分析カテゴリーを導入するユニヴァーサルなものにかわった。」とも説明されている。

これらから「社会的、文化的に形成された性別」であるジェンダーとは、ジェンダー二元性、男女への役割期待における峻別等が規範化されており、生物学的な男女差とは異なって強調されるのであり、この傾向は一方の男性性を主として、他方の女性性を従属的な地位とする男女の非対称性、「女性性への偏見」と結びついていると考えられる所から、公平、公正性を欠く傾向として、今や広く社会的に受け入れられている概念といえよう。

このようなジェンダーと言う概念は、人間社会、人間の観念世界、レヴィ＝ストロース流に言えば象徴機能、丸山圭三郎的に言えばシンボル化能力が、自分を取り巻くある事象について差異化し、生み出し展開する、眼前（現然）の事実を越えて広がる認識構造であり、その産み出した観念としての「ジェンダー概念」が、現実の男女の生物学的性差を越えて、男女の社会的位置、役割の差異、そして峻別を求める傾向として指摘されている所であろう。

そこで、われわれが生きる現代社会を構成する、社会的な諸現実に対して、ジェンダー概念を分析カテゴリー（分析軸）として検討を加えると言う手法が、諸学問分野のユニヴァーサルと言うべき全分野にわたる既成の概念について、その中の男性中心主義的傾向が明らかにされつつあると言えよう。その分析の議論の展開の範囲の広がり、その全分野における有効性が指摘されている所である。

生物学的な個体としての生物的存在としての人間、そして集団をなし、社会文化的な存在として社会関係を形成する人間生活へと移行する人間にとって、その移行の契機であり動因であるところの、生殖の相手たる異性との係り合い、その中で、男女の非対称性が生じ、深化せしめられている社会的事実群が指摘されている。それらが「ジェンダー」とされる社会文化的な事象として、「ジェンダー現象」として指摘されていると考えられよう。

現代社会を構成する様々な事実、そして概念の構成され方について、既成の概念、通念、様々な常識、概念構成に対して、「ジェンダー概念」を通しておして再分析、最定置をする試み、世界の再構成と言うべき言説こそが、ジェンダーの議論とも考えられる。

ジェンダーの視点から、あるいは「ジェンダー」を「分析カテゴリー」としての既成の概念構成への修正を求める動き、これらは多様な展開をなして広がり、学問の全分野に及んで広がりつつあると思われる。この「ジェンダー概念」の分析カテゴリーとしての、人間の生活の全分野的な広がりをもって、言語的に表象されたすべての意味生成への問い返し、その

全分野におよぶ有効性自体が、人間存在における社会文化的事象とは、かくも眼前（現前）の事実を越えて広がる、人間生活の全体をカバーしているという事の証左でもあろうか。

生物的存在としての男女、社会文化的な規定性の中の男女、その関係性は、決して消える事のない響き、自然生物性を抱えつつ、歴史的経過を背負い、因習と社会規範をそなえつつの、社会文化的な規制、慣習、習俗の中にあるといえよう。

③　センのエンタイトルメント・アプローチ

ノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・センは、自身が 10 歳の時に目撃体験をしたベンガル飢饉などを分析するにあたり、「エンタイトルメント」概念を創出、この概念によって飢饉の原因の解明を試みている。

エンタイトルメント(entitlement, 権原）とは、「ある社会において正当な方法で『ある財の集まりを手に入れ、もしくは自由に用いる事の出来る能力・資格』[9]」さらには「私的所有制度を前提に，社会において当人に開かれたいろいろな合法的ルートを経て取得し得る，交換可能な財の組み合わせ[10]」と定義される。このような財取得の合法的ルートには資本市場における売買の他に、交換・生産・移転（自家生産、労働の現物対価、贈与等の市場外の物資取得、物々交換等）を含むと理解される。

（センは 1983 年には、「開発：今何処に」と言う発展途上国の経済開発に関する論文の中で、その後のセンの貧困概念を構成する中心的なターム「ケイパビリティ（潜在能力)」と、この「エンタイトルメント（権限)」という二つの概念を用いているが、この二つの概念の関係について、「エンタイトルメントは『ケイパビリティの導関数にとどまる』[11]」として、「ケイパビリティ」が「エンタイトルメント」より広い概念であるとしている。）

絶対的貧困の窮まった状態である飢饉の分析が、エンタイトルメント（権原）の崩壊過程、食料や財の交換のための社会的権能の崩壊過程として分析され、飢饉という人間の生物的生存を脅かす絶対的貧困でさえもが、その地域への食糧の供給の不足－FDA（Food Availability Decline）を主要な原因としているのではなく、食料供給の不足の影響を最も大きく被る人々、影響の少ない人々、階層間の格差、不平等の構造があり、それに従って階層毎に異なった深刻さをもって影響を及ぼすという社会的事実が証明された。

---

9 絵所秀紀　山崎幸治編著　『アマルティア・センの世界―経済学と開発研究の架橋―』　P 88　晃洋書房　2005 年 2 月 25 日

10 http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsce/db1980/8100sa.htm　2016/08/01

11 絵所秀紀　「後期アマルティア・センの開発思想」P13
repo.lib.hosei.ac.jp/bitstream/10114/1433/1/69-2esho.pdf　2016/08/01

この事は、その地域で発生した飢饉の影響さえもが、社会的文脈の内側に、社会的権能の分配動向によるという、人間における絶対的貧困の現実もまた社会関係性という文化事象、社会の機構との関係、権能の配分状況、不平等に規定されている事、社会文化的な問題と不可分である事を示したと言えよう。そしてこの事から、過酷な絶対的な貧困状態を引き起こすところの不平等問題は、社会関係性と表現され得る人間生活の全分野を覆いつくしている事、社会を営んで生活する人間の絶対的貧困とは、不平等問題を重なり合わせて抱えている事が示されていると思われる。

④　現代社会のホームレス状態

15 年も前の調査ではあるが、都会（新宿区）の路上生活、ホームレスの調査資料を基に、貧困不平等問題は経済要因ばかりでなく、人間生活の社会心理的な側面の把握対応が必要であり、貧困とは社会生活全体の涵養、社会の一員として自身の社会的紐帯の回復が問題である事を視野に入れて、対応されるべき事態であることが示されている、そうした構造的な把握を進めたい。

野宿生活の中の生活問題：ホームレス状態におちいった場合の生活問題として、住宅の喪失から始まる諸問題、それらが引き続いていると言う理解が、ホームレスという呼称であろう。住宅喪失は失業、家賃支払いの困難を契機としており、その状態に至る生活問題の蓄積を抱えているようである。野宿生活（ホームレス状態）に至る以前の職業生活、家族関係に於ける諸問題が、野宿生活への移行への大きな影響、関連性が認められる。当時の野宿生活者は年齢的には 50 代が 4 割を占めており、若年化の傾向が指摘されていた。そして野宿生活を始める地域の選択には「なじみ」があった事、そして炊き出しがある地域、おおぜいの人々がホームレス生活者としている、いわば仲間がいる所から、新宿歌舞伎町界隈に結果として多い事が挙げられている。この人生において、その生活危機の中において、何だかの「人との繋がり」が、野宿の場所選定に係わっており、動機といえるとおもわれた。

そして定住用に、ブルーテント等を設置することなく、生活をする移動状態のホームレス生活をする人々も多く、日雇い就労日数、就労の有無により、生活物資（食料・衣服・清潔保持・寝床等）の獲得に集約されるホームレス状態における生活問題は、相違点が認められるようである。しかしなぜ野宿生活を始めたのか、そしてその脱出の為の可能な方策については、青テント定住の野宿の場合には、その生活を維持する、継続するためのネットワークができていて、一つの社会集団が形成されていると思われた。

野宿生活に入る直前職の調査によれば、土木・建設・技能工が多く、それは 20 年ほど前のまだ豊かだった日本社会の建設ブームなどの余韻もあった時代性を反映していると思われる。その後ホームレス支援法が制定され、石原都知事時代の流れから、都内の各公園のブルーテントは一掃されており、現在の永住する住まいを確保できない層が、漫画喫茶などで夜を明かす、そうしたビジネスも生まれて、その顧客として生活をすると言う、現在のホームレス事情へと変遷をしていると思われる。これが現在の日本のホームレス問題、野宿者、或いは貧困格差問題の現状であろう。

当時の公園での野宿生活は、食糧調達＋住まい（寒さと雨からの避難）＋風呂清潔保険健康問題＋仕事探し（面接時の住民票の所在、資格等能力の継続、職歴、病歴、対人関係能力、清潔保持）という、生活維持の為の生活問題とともに、その状態にある人々の、心理的な負い目、剥奪感があり、生活を維持するために、外部の一般社会との接触の在りよう、金銭的、非金銭的なかかわりの深さと広がりについて、調査的に把握できない面も多いのではないかと思われる。野宿者の一時保護所（東京都施設）から、就労へ向けての施設に移って初めて、借金等の話が出て来る事が多いとのことであった。

多重債務に加えて、軽度の知的障害を抱えた野宿生活者も少なからず見受けられる中で、生活状態としては、絶対的貧困に近い状態であり、厳寒の時期、酷暑の時期を越えねばならず、その状態からの脱出には、仕事の調達、福祉事務所との関係、当時はコンビニの廃棄弁当を流してもらうなどと、仲間内での人間関係が、重要な生活維持、生命維持の為の条件になっていると思われた。こうした人間関係の繋がり、社会文化的な側面が、生命維持に係わる重要な能力であることは、野宿生活者においては、市井にある暮らしよりも、より明白な事実であったと思われる。

貧困とは、現代社会の、野宿生活においても、当時の新宿区の公園の野宿においても、社会文化的側面の問題と言わざるを得ない側面が、色濃く把握されてくるのであった。

公園巡回の相談員、私達には話さないけれど、一時保護センターに入所して、仕事探しが現実の課題となった時点で、語り出すのが借金問題、多重債務問題である事、実態を話す場面と、それに触れない場面を使い分けながら、その日の生活物資（食料等）が確保されると言う生活であろうというのが、当時の野宿生活への印象であった。

野宿生活に至る経過：野宿生活は、家族職場からの撤退、排除、離脱、離婚などの後、職場からの離脱、単身生活へ、公園の野宿へと動く事例がおおいのだが、その発端は、個人的な脆弱性も野宿への背景要因と考え得られるのは（軽度の知的障碍者・ギャンブル依存等）も多いようだが、離職の経緯として職場環境（飯場　土木作業、寄せ場、派遣労働、安定雇用的な職場等）からの撤退が、定位家族の不安定、創設家族の崩壊（離婚）、失

業、多重債務問題も多く、そこから公園での日雇い就労へと移り、賃金貨幣経済システムからの離脱（無収入）へと移行していく事例が多いと思われた。このような経過と、現在の生活実態、人間関係、社会関係からの撤退について、社会的排除という生活困難の捉え方は、社会文化的な人間の生存条件としての様々を浮かび上がらせていると言えると思われた。

現在の生活状況は、絶対的貧困状態と言わざるを得ず、冬季には凍死も発生するなど、貧困へと至る個人的な経過からは、次第に排除（離婚、親子関係の脆弱性など、家族との関係性が喪われる）という経過をたどりつつ、個人的な脆弱性（病気、障害、高齢化、依存症、精神疾患）が、職場環境の不安定要因とが絡み合い、失業状態で、単身で寄せ場に地理的に近いなどの条件、なじみの地域などで、日給仕事を求めながらの、公園生活へと踏み込む事例が多いと思われた。

現代社会のホームレス状態と社会的排除：社会的排除とされる新しい貧困の定義を対照してホームレスの実態に触れるならば、現代日本ではすでに地域生活、地域的共同性は都会では失われて久しいと思われるのだが、しかしながら新宿区発行の〔路上生活者実態調査報告書〕2003 年 3 月発行によれば、区内の路上生活者は、かつての職場、住まい、或いはなじみのある街として、野宿生活に陥っても、新宿へと流れる人の割合が多いことを示している。（P26）

ホームレス生活の場所の選択には、それぞれの過去の生活歴により影響を受けている事が伺え、人間生活の継続性を示しているように思われる。

また、生活ニーズとしては、絶対的貧困をカバーする食糧、住まい、病気への対応が求められつつ、この貧困からの脱出は、まず支援する福祉事務所との関係性、同じ立場の野宿者同士のネットワーク、あきらめ等へのカウンセリングなどと、人間関係の問題、心理問題が大きいことが伺えた。これらの調査資料自体が、何処まで本音が語られていたのかといった、人間の相互行為、訪問相談事業としての効果についても、心理社会的問題をかかえつつ、進められていると言う実態こそが、現代社会の貧困不平等問題の極まったあたりの事情であろう。社会的排除と言う貧困問題は、極めて社会性を問われ、社会関係性を問われる、現代社会の縮図、その不平等の構造と言わねばならないのであろう。

不平等問題の過酷な状態としてのホームレス生活でありつつ、野宿までの経過が示す所の、日本社会が農村社会から都市化へ、その中での国民の生活変化があり、集団就職等で集まった人々の中の、家族、職場から離脱し、日本社会の基本的な人間関係から、言い換えればそうした人間関係の重なる社会関係から離脱した人々においては、生活の全分野の劣悪化に向かい、その中であっても、公園内人間関係、近隣のコンビニからの食事調達などの、人間関係をもって命の生活が継続され得るといった野宿生活のように思われた。そ

の中の生活ニーズであればこそ、福祉事務所との関係、仲間関係などが命綱と言った側面があって、改めて、人間生活を覆いつくす、社会文化的な側面を、思い知らされるところであった。

人間生活には、食糧の次に「住居」が不可欠な生活資源であり、それを社会関係性において、家族関係、職場関係、福祉事務所との関係によって確保し、生活を維持できるのが生活である事を見える形で指し示している所のホームレス生活であろう。社会的排除という新しい貧困の定義は、極めて文化人類学的な定義であると思われた。あらためて、人間存在はその命を社会関係の中に託しており、この文化人類学的な規定性、人間生活の構造をもって、人間の死亡の時、生物的生命の終焉の形が規定されている。

⑤　EU の社会的排除への対応

新しい SPPM（社会保護パフォーマンスモニター）の包括社会指標では、所得の不平等として最高位所得集団と最低所得集団の所得総額を問題としており、階層間の格差の動向、不平等が捕捉される傾向も見られ、そして新しい幸福指標は、ネガデータとしての貧困調査事項、あるいは貧困調査のネガデータとしての幸福調査事項という関係にあり、センのケイパビリ・ティアプローチにも似た、多軸的、多面的な構成になっている。ここでは社会関係的側面を捉える構成も維持しつつ、 生活のベースにある物質的な剥奪に重み付けつつ、その社会関係的側面への浸透、影響、不平等の進行を捕捉しようとすると理解される。(相対的貧困、剥奪が採用されている。) そしてグローバル経済の動きと EU の経済政策、経済情勢と就労環境、経済政策の中の雇用政策と一体的な国民生活を踏まえ、社会経済的な変化の中で動く国民生活、そして低所得の動向、特に低位の階層の動向についても、関心を強めていると思われる。

抜粋　当ホームページ　eu2020sp4.pdf (mirai21canalnew.com)

まとめ　**自然的生物的な生存条件と社会文化的な生存条件の関係**

人間存在、その生活を、その「自然生物的側面」と「文化社会的な側面」の重なり合いとして捉える事ができるとして、論を進めるならば、人間存在における自然生物的な側面は生物種としての普遍性を負っており、その中身は生物個体としての**自己生命の維持**であり、もう一つ種の継承、次世代生産（生殖願望)、育成と言う、生物普遍の自己保存と**自己複製の願望を、**おそらくはこれらを至上の命題として、自然淘汰を生き抜き、偶発事情の重なり合いを越えて種の継続を果たしつつある人類であり、その生命原理は消える事ない響きを続けているとの指摘には、頷かざるえないであろう。

この事実の一方で、人間は集団をなし社会を営み、社会文化的に生を営むのであり、その集団内関係、社会関係、社会集団的な規制、集団規律、習俗、法制度からの、いわば社会文

化的要請の中に生をいとなんでいる。両側面の関係は、生物種としての普遍性、個の存続と種の継承という自然生物性に対峙して、この命題故に受け入れられたのであろう、社会集団の形成過程であり、人間は社会集団の要請を拘束を受け入れつつの生を営んでいる。その事が人類の種の継承過程としての展開の中の基本的な構造となって、人類は社会文化の枠の内側の存在として生物的生命活動を営みつつ歴史を刻んでいるといえよう。

2009 年 10 月 30 日 100 歳の長寿を全うしたレヴィ＝ストロースは、その最初の著作「親族の基本構造（1949 年)」において、その序説第 1 章を自然と文化としているのだが、その視点、人間の自然から文化への移行と言う視点をもって、貧困と不平等の考察を進めようとすれば、人間の生活の全分野を覆いつつ、互いに重なり合い、影響を及ぼしつつ展開する人間生活の諸相を含めた検討が必要であり、それは不平等問題に重なっていると思われる。

現下 21 世紀の人間社会の、先進工業諸国と発展途上国の間の格差、一国内での貧富の差、我国でもホームレス状態を生きる人々などの様相は、生物種としての人類、ホモ・サピエンスが抱えている普遍的な生へのニーズ（要求）と、社会文化的な諸ニーズ、無形抽象的な側面にも展開しているであり、生活財の交換権限、集団への参画、諸権能における分かち合い、**互酬性**に何だかの齟齬を生じ、諸ニーズが満たされず、窮乏状態にある人々が、集団的に存在している。こうした現代社会に於いて、これに対峙する人間において、剥奪が、心理的衰弱が生じていると言わざるを得ない 21 世紀であろう。

※互酬性：レヴィ＝ストロースは，婚姻は集団間での女性の交換であり，互酬性こそ集団間に連帯を生み社会を成立させる原理だと論じた。百科事典マイペディア

「また、レヴィ＝ストロースが最後に言及した女性の交換が言語を含めたコミュニケーション機能の態様の一つであるという観点をさらに拡大して、交換や互酬性を人間のコミュニケーションとして考えることにより、新しい視野が広がる可能性がある。」ともいう。

レヴィ＝ストロースは女性の交換のこのような円環をなすシステムについて，システムへの参加は「より広い意味で，集団が投機する用意がある」※投機（もともとは機会に乗じること）ときであるという。ここには賭がある。賭金を得るためには「初めにリスクをとる」ことが必要である。それはいいかえると，　ここには「信頼の要素があり，円環が再び閉じられるためには信頼が必要なのである」を意味している。

こうみてくるとハウは贈与を次々と生じさせるこの循環的関係を紡ぎだし、また完結させるための「のりもの＝媒体」なのであることがわかる。(贈与交換の現象がこのように贈り物を交換する二人の行為者の関係をこえ，その背後にもののトー タルな循環のシステム

を想定するものであることが明らかになる。）そうするとそこからさまざまな興味深い観察と分析が導き出せる→言語論の中のコミュニュケーション、双方向的なランガージュの駆動、応答し合う言語表象者と言語の意味を介して動くコミュニュケーション過程、その中で受意者達相互の集団性、応答性、社会文化性の深化と言った傾向であろう。